様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２９ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2015
課題番号：２３５２０６６７

研究課題名（和文）短期交換留学生は異文化にどう適応しているか

研究課題名（英文）Transformation of the Meaning of Study Abroad and the Process of Intercultural Adaptation during a One Year Stay

研究代表者
奥村　圭子（OKUMURA, Keiko）

山梨大学・総合研究部・教授

研究者番号：１０３７７６０８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では短期交換留学生として派遣・受入れされた調査協力者39 名とともに Personal Attitude Construct 分析（個人別態度構造 PAC 分析と示す）（内藤　1993）とマンスリー・レポートの内省記述の分析を基に、留学意義のイメージや意味解釈を加えながら、認知変容の分析・考察を縦断的に行う質的研究を進めてきた（奥村 2012； 2016）。しかし、調査協力者の文化への理解は、表層的な知覚、気づきに留まっている場合と、価値観、態度、行動を左右し変化させる認識に至っている場合では大きな差があること、その文化に関しても深さの差が多岐に亘っていることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study analyses the impacts of a one-year study abroad bidirectional exchange programme on students' university lives and how they view the process of accommodating themselves and interacting in a new cultural environment and unfamiliar academic community during their stay. 39 participants, bidirectional exchange students were involved in this longitudinal study and their personal intercultural change, adaptation issues and developmental growth process are examined by Personal Attitude Construct (PAC) analysis (Naito 2002), a qualitative research method, together with in-depth interview at the beginning, middle and end of their Study Abroad period. It has been found that their intercultural learning can be varied and intercultural sensitivity can develop both the degree to which differences is accepted or adapted to, and the depth of the experiences. The findings of the study may be used to make suggestions to future Study Abroad candidates.

研究分野：外国語教育

キーワード：異文化間コミュニケーション　異文化適応　短期交換留学　受入れ　派遣　PAC分析　認知構造　認識の変容

１．研究開始当初の背景

(1)　そもそも、経済産業省（2011）がこれからのグローバル人材として挙げるのは、１）語学力・コミュニケーション能力、２）主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、３）異文化に対する理解と自国の人間としてのアイデンティティなどの要素や資質を併せ持つ人材であるが、2013 年の教育再生実行会議の第三次提言は、「海外留学は、グローバル人材に必要とされる要件を習得するために不可欠な教育機会である」と指摘している。教育の国際化の中で、日本政府の留学生受入れ政策、及び派遣政策の推進を受け、研究代表者の勤務大学においても国際的な人材の育成と大学教育の国際化を目指し、海外の授業料不徴収提携大学との間で毎年 15 名以内の学生交換に取り組んでいる。遺憾ながら、交換留学制度を利用して派遣される学生数は、受入れ学生数の半分にも及ばないという不均衡な状況がこの７年ほど続いている。JASSO（2010）によると、日本からの海外留学者数は平成 19 年の段階で過去４年間、減少に転じているとのことで、これは全国的な傾向であろうか。海外へ留学しようという学生数の減少は、TOEFL などの英語評価試験で十分な成績が得られず応募の要件を満たさないという英語力不足の問題のほか、黒澤（2010）は不況下の社会情勢が日本の若者を内向き・安全志向に向かわせていると指摘する。就職活動に出遅れ、不利ともなるリスクを伴う半年、一年間の留学を選択しない「挑戦を忘れた学生」たちに留学の意義を実証的に示すことが、喫緊の課題なのである。留学を志す学生は、世界に目を向け学ぼうという意欲があり、評価されよう。留学をする学生にはグローバルな視点で考える能力や国際的コミュケーション力、そして語学力など、海外でしか得られない能力を習得し、国際的人脈を築いてほしいと願っているが、彼らは異文化接触の中で何に影響を受け、どのような意識の変化があり、自らが立てた留学の到達目標を達成しているのだろうか。これらの問いに答え、留学経験がいかに将来に活用されているかについても検証すべきであろう。

(2)　海外に出た交換留学生に関しては、異文化適応や語学習得の過程と結果の視点からさまざまな研究がなされているが、インタビューや半構造的アンケートなど参加者の記述的データに関して、留学中（Kinnell 1990, Lee & Wesche 2000 など）を対象とするものや、留学中と帰国後の比較をするもの（Crealock1999、Allen & Herron 2003 など）がある。日本人研究者の多くは心理学的フレーム・ワークから量的研究手法を用いているが、最も長期的で規模の大きい調査は、日本人高校生の留学前・中・後の段階で質的・量的調査を行った八島（2004）と Yashima et al(2004)である。学校教育の中の第二言語習得に主軸が置かれ、本研究課題とは枠組みが異なるものの、多様な示唆に富んでいる。ただ、高等教育レベルの交換留学生を対象とした研究が望まれる。

(3)　一方、在日留学生に関しては、異文化の適応に関わる個人的な要素と環境要因が検討されている。個人的要素については、アイデンティティー(大野 2002、趙 2007)、学習態度･意欲(吉 1999)、言語能力(安達 2002)、また、環境要因に関してはソーシャル・スキル（田中　1996)、留学目的（葛 1999)、異文化理解（加賀美 2002）などの影響が論じられている。しかし、異文化に関する経験や個人的な影響要因を認知構造との関係で考えたものは数少ない。その中で、井上（1998, 1999）は在日留学生の文化受容の面からカウンセリング場面での PAC（Personal Attitude Construct)分析の事例研究を発表している。井上はこれらの中で、PAC 分析がカウンセリング場面でなくとも、機能として調査協力者の自己理解を深めるために有効であり、客観的なデータ・資料・査定・評価の機能をもっている有用なアセスメントのツールであることを示している。本研究課題では、PAC 分析を用いることで、個人内の認知面、情動面、そして態度・行動面での異文化適応を詳しく検討対象とできる意味で、意義深い研究となると確信する。

２．研究の目的

(1)　本研究課題の目的は、異文化間心理学、言語教育の統合的視点から、１）海外へ、また日本にて交換留学を通して、派遣・受入れ学生たちはいかに文化を受容し異文化適応をしているか、認知構造の分析である PAC 分析（内藤 2002）とインタビュー調査を通して、認知面、情動面、そして態度・行動面を考察し、適応の促進要因と遅滞要因を検討し、２）日本への留学を選択した交換留学生が日本の大学教育と異文化体験から何を得るのか、そして彼らが留学体験を生かし、日本社会とグローバル社会にどのように関わっていこうと考えているのかを明らかにすることである。これらの研究が今後の大学教育の国際化の促進に役立つ示唆を与えてくれるに違いない。

３．研究の方法

(1)　手法として内藤（2002）が開発した PAC 分析を用いる。PAC 分析法は「テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被検者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」（内藤 2002：1）で、丸山・小澤（2007）が示すように以下のような特徴がある。1) PAC 分析は、調査協力者主体の調査であること。通常のアンケートやインタビューで調査実施者が質問項目を事前に決めておいて行うものと異なり、連想刺激文を基に調査協力

者の自由連想による語、フレーズ、文を出してもらうため、実施者側からの制限がない。2）連想間の類似間評定を行うこと。調査協力者が出した語、フレーズ、文のイメージ間の類似度を数値化し、この情報からデンドログラム（樹形図）を作成する。3）調査協力者がクラスター構造のイメージや解釈の報告を行うこと。上述のデンドログラムを見ながらそこに現れた調査協力者自身が挙げた語、フレーズ、文などの項目のまとまり、つまりクラスターを見ながらイメージや解釈を語る。調査実施者はその語りや語の重要順、イメージを聞きながら、調査協力者の枠組みの中で解釈を試みるものである。インタビュー調査自体は質的研究と言えるが、上述の 1）と 2）の点から量的な調査の側面を持っていると言える。また、末田（2001: 74）は、調査協力者の報告、及び解釈はデンドログラムに基づいているため、再現性が高い点から、単独での信頼性の高さのみならず、相互関連的な信頼性も高いことを利点として挙げている。PAC 分析を用いる理由として、その全過程で調査協力者自身が自分の語る留学に対するイメージとその解釈の言語化から、通常のアンケートやインタビュー調査では得られない調査協力者の多様な経験や感情を含む内面の構造を明らかにできる（内藤：2002）点、文化適応過程を見ていく上で、調査協力者にとっても有益な気づきが促進できると予測できる（井上：2001）点の二点が挙げられる。

調査開始前に趣旨説明を行い、調査協力者はいつでも調査を中止できること、回答を拒否することができる点を確認し、録音がされることへの承諾を取り、プライバシーと個人の権益の保護が研究発表時に最優先される点を。内藤（2002）の PAC 分析手順に原則的に沿い、手続きとして、1)連想刺激文の提示、2）当該テーマに関する自由連想を調査協力者がカードに記入、3）連想項目の重要順位への並び替え、4）連想項目間全ての対の類似度評定(7 段階評定)、5）類似度距離行列からクラスター分析、及びデンドログラムの作成（分析ソフトは HALWIN6.24、距離関数はウォード法を使用）6)調査協力者による各クラスターについての解釈、7）各連想項目のイメージ（＋、－か±かなど）の聞き取り、各クラスターのイメージやクラスター間の関連性などについてのインタビューで語ってもらった。本稿の調査では、調査協力者が一番心地よく使える英語を媒介語として用い、また、1）から 4)について、時間的短縮と調査協力者の心理的負担を軽減するために開発され、カードに書き込む作業、カードにある連想項目の重要度評定、項目間の全ての対の類似度評定作業などを PC 上で行うことができる土田(2009)の「PAC-assist」という PAC 分析支援ツールを使用した。1 回目の留学開始時の連想刺激文は、図２の通りで、２回目留学半ばと３回目留学終了直前においても同様に留学の意義を問う連想刺激文を用いた。

４．研究成果

日本人学生の主な留学阻害要因を British Council(2014)は、１）IELTS などの英語評価試験で応募の要件を満たさないという英語力不足の問題のほか、２）経済上の問題、そして３）安全面での不安、であると分析する。これらの要因を少しでも軽減しようと、研究代表者の勤務大学でも、2014 年度より英語圏からの留学生を英語学習サポート Student Assistant(SA)として雇用すると同時に英語学習の専門家を置き、共創学習スペースを開設し英語学習と交流の機会を増やすほか、条件付で留学の助成金を設け、気軽に参加可能な春季・夏季のプログラムを増設、危機管理に関しての事前講習や留学中の支援へも一層力を入れているところである。

短期交換留学生として 10 カ月から 1 年間派遣・受入れされた調査協力者 39 名（2011 年度 7 名、2012 年度 15 名、2013 年度 12 名、2014 年度 5 名）とともに Personal Attitude Construct 分析（個人別態度構造　以後 PAC 分析と示す）（内藤 2002）とマンスリー・レポートの内省記述の分析を基に、留学意義のイメージや意味解釈を加えながら、認知変容の分析・考察を縦断的に行う質的研究を進めてきた（奥村　2012; 2016）。ある程度の個人差はあるものの、その変容には共通した特徴が見られた。

1)抽象度の高いイメージから徐々に具体化・明確化したイメージを持つようになっている、
2)個人が得た認識レベルであったものに、その認識を他の人や社会と共有したいという社会的な視点が加わっている、
3)自分自身や自文化を基に相手文化やその人々を観察し比較するが、異なるものとしての認識から、異なることが普通で、多様なのだという認識が生まれたり、共通点にも着目したりするよう変化している、
4)自己への振り返りや人との関わりから、将来へのイメージが形成されている、
5）言語習得は重要な目的としての認識から、コミュニケーションの障壁もしくはツールとしての認識へと変化している、
などの点であった。

これらの特徴は、前述の経済産業省の「グローバル人材」の要件の一つである「異文化に対する理解と自国の人間であるアイデンティティなどの要素や資質を併せ持つ人材」に、彼らが近づきつつあることを示している。しかしながら、全体的な傾向が上記のようにつかめたものの、調査協力者の文化への理解は、表層的な知覚、気づきに留まっている場合と、価値観、態度、行動を左右し変化させる認識に至っている場合では大きな差があ

ること、また同時にその文化に関しても深さの差、つまり顕在的な表層的レベルから潜在的な深層レベルのものまでと多岐に亘ることがわかり、それらをうまく考察・分析で反映できずに苦慮しているところである。現在様々な異文化適応モデルを応用しながら、ケース・スタディを進めているところで、新しい理論的フレームワークが提唱できればと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　7　件）
2016
① Graham P.Z. & Okumura, K. How best to prepare students for short-term study abroad programmes, based on their expectations and experiences『高等教育と国際化』山梨大学教育国際化推進機構紀要年報　No.2　(印刷中)（査読無）

② 奥村圭子「交換留学の意義の変容と異文化適応のプロセス－在日留学生のケース分析から－」『高等教育と国際化』山梨大学教育国際化推進機構紀要年報　No.2　(印刷中)（査読無）

③ 西部由佳・岩佐詩子・金庭久美子・萩原孝恵・水上由美・奥村圭子　「ＯＰＩにおける話題転換の方法」『日本語プロフィシェンシー研究』 4号(印刷中)（査読有）

2014
④　Mayne, R. and Okumura, K. “The Use of Podcast in Higher Education Language Teaching”. *Journal of International Student Center*, Vol. 9、1-8. University of Yamanashi.　(査読無)

⑤奥村圭子、江崎哲也、伊藤孝惠　(2014)「2013 年度山梨大学留学生アンケート調査報告」『山梨大学留学生センター研究紀要』第９号、9-41.（査読無）

2011
⑥奥村圭子「英国の留学生政策の推移―我が国の大学での留学生受け入れへの示唆」『ウェブマガジン 留学交流』第１号、1-7.

⑦奥村圭子、伊藤亜希子、伊藤孝惠「地域の国際化がもたらす可能性―地域での異文化間交流」『山梨大学留学生センター研究紀要』Vol.6 、1-15

〔学会発表〕（計　4　件）
2016
① 西部由佳・岩佐詩子・金庭久美子・萩原孝恵・水上由美・奥村圭子　「ＯＰＩにおける話題転換の方法―上級話者と中級話者に対するテスターの関わり方」函館国際ホテル（北海道、函館市）、8 月 1 日

2012
②　奥村圭子
「短期交換留学を通しての留学意義の変容と異文化適応のプロセス」第 15 回英国日本語教育学会大会、マンチェスター大学（英国、マンチェスター市）、9 月 1 日

③ メイン・ラッセル・奥村圭子
「大学教育における Podcast の試用」、第 19 回大学教育研究フォーラム、京都大学（京都市、京都府）、3 月 14 日～15 日

2011
④ Okumura, Keiko. “ The life story interview activities in Japanese Language Teaching ” 第 14 回英国日本語教育学会大会、オックスフォード大学（英国、オックスフォード市）、9 月 10 日

〔図書〕（計　1　件）
2013
①　奥村圭子他編、『研究社日本語口語表現辞典』、研究社、1188

〔その他〕
ホームページ等
http://erdb.yamanashi.ac.jp/rdb/A_DispDetail.Scholar

６．研究組織
(1)研究代表者
奥村圭子（OKUMURA, Keiko）
山梨大学・総合研究部・教授
研究者番号：10377608